

福音メッセージ「正しい人」ではなく罪人を招くために

マルコの福音書 2章 13～17節 【新改訳改訂第3版】

- 13 イエスはまた湖のほとりに出て行かれた。
すると群衆がみな、みもとにやって来たので、彼らに教えられた。
- 14 イエスは、道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをご覧になって、「わたしについて来なさい」と言われた。すると彼は立ち上がって従った。
- 15 それから、イエスは、彼の家で食卓に着かれた。
取税人や罪人たちも大ぜい、イエスや弟子たちといっしょに食卓に着いていた。
こういう人たちが大ぜいいて、イエスに従っていたのである。
- 16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちといっしょに食事をしておられるのを見て、イエスの弟子たちにこう言った。
「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか。」
- 17 イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。
「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。
わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

「正しい人」ではなく罪人を招くために

(マルコの福音書2:13~17)

2016年3月6日

I レビ(=マタイ)の召命

(1) 取税人:ローマ帝国はユダヤ人を使ってユダヤ人から徴税した

- ① ガバイ:一般税(不動産、所得、登録税など)
- ② モケース:何にでも課税(舟、釣った魚、船着場、旅人のろば、その奴隷や使用人、持ち物)、個人の手紙を開封し、課税対象の商用が言及されているか点検
- ③ 大モケース(人を使って②の仕事させる)/小モケース(徴税実務担当)

(2) イエスの招き:「わたしについて来なさい」

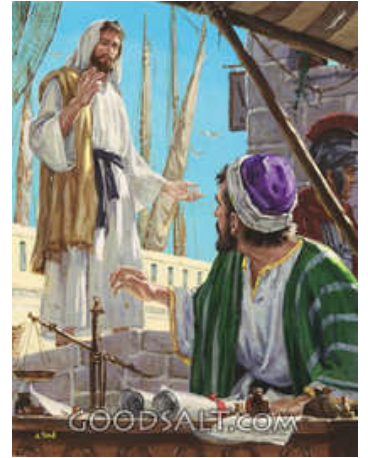
- ① 予備知識:マタイがイエスを、イエスがマタイを

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。 / あなたこそ私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。 / あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。 / ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。(詩篇 139:1~4)

- ② 単純:「わたしに」(聖書と祈りを通してイエスを知る)
- ③ 継続:「ずっと、いつまでも、ついて来なさい」(一生の生き方)

(3) レビの応答:「立ち上がって従った」

- ① 栄光の昔(レビ族は神殿で仕え、祭司を輩出した)と今(同胞から恨まれる取税人)
- ② 信仰:信じる対象の大切さ(ナチスドイツ、オウム真理教事件、他) vs. 聖書、イエス・キリスト
- ③ 決断:「立ち上がって」(Cf. 中風の人「起き上がり、床を取り上げて」)



II レビが開いた食宴

(1) 目的:新しい人生の門出(イエスを仲間を紹介)

食事の重要性:〈契約〉〈友情と信頼〉のあらわれ

ともに食事をした人を裏切る=人間として最悪、最低の行為(ユダ)

(2) そこにいた人々

- ① 主賓:イエス
- ② レビの友人たち(取税人仲間、罪人=モーセの律法やラビの教えと関係ない生き方をしている人々)
- ③ パリサイ派の律法学者たち:「なぜあんな者たちと一緒に食事をするのか」

(3) 福音:「罪人」には喜び、パリサイ人には不可解

- ① 「医者」(イエス)が必要なのは「病人」(罪人)
- ② イエスは、「自分を正しい、と思う人」ではなく「自分が罪人」とわかった人を救いに招くために天から来られた。「義人なし。一人だになし」(ローマ3:12)

私たちは果たして正しい人間であるだろうか 中村春雨(吉蔵)『無花果』

(6) エミー・カーマイケル

私は聞いた。「さあ、従ってくるのだ」という主の呼びかけを / それだけだった
地上の黄金はみるみる色あせていった / 私のたましいは主を慕った
私は立ち上がって従った / それだけだった
従わない人があるだろうか / 主が呼んでおられるのを聞きながら



主人公=鳩宮一郎 姉=学費のため芸者に
弁護士の娘=さわ メリナ=牧師、エミヤの
父 鳩宮の妻エミヤ さわの娘
エミヤを嫌う両親



中村春雨(吉蔵) 『無花果』

それは、あるアメリカ帰りの牧師の話であった。

牧師はエンジェルのような、優美で清らかなアメリカ人の女性を妻にして帰ってきた。

牧師は着任の挨拶の際、信徒達の前で、十数年前の自分の過失を告白する。牧師の名は鳩宮庸之介といった。鳩宮は十数年前、法律を勉強する書生であった。その学資を貢ために、姉は新橋の芸者になった。鳩宮は、ある弁護士の家に住み込んでいたが、そこに一人の娘があった。その娘と鳩宮は恋愛をした。だがこの恋には立身出世を願う鳩宮の気持ちが、全く働いていないとはいえなかった。何時しか二人は互いに許しあう仲になった。しかし、このことが親たちに知れて、鳩宮は弁護士の家をおいだされる。傷心の鳩宮は判事試験にも失敗し、その上相手の娘は他の男と結婚してしまった。失望がかさなって、彼は海外に飛び出した。

アメリカでメリナという熱心な牧師の教えを聞き、キリスト信者となった。彼はメリナに助けられてエール大学にはいり、神学士となって帰朝した。妻は、そのメリナの令嬢であった。妻エミヤも熱心な信者で、海外伝道を志していた。こうして帰ってきた鳩宮は信者達の前に、昔、愛人を犯したことを、「処女の神聖を犯した」と心からざんげする。

その後、長いこと音信普通であった父母と姉の居所が知れた。姉は銀行家の妻になり、自分の父母をひきとっていた。一同は、訪ねた鳩山を喜んで迎えたが、職が牧師と聞いてひどくがっかりする。「牧師なんて、そんなろくでもない」という、親や姉たちの言葉は鋭かった。「牧師なんか辞めて、銀行に入りなさい」と義兄もすすめた。牧師は三十円の月給だが、銀行は百円になるというのである。この申し出をきっぱりと退けた鳩宮は、意外なことを親から聞かされた。一別以来、幸福に暮らしているとばかり思っていた、かつての恋人が牢にいるというのである。その娘は沢といった。沢は親に強いられて、泣く泣く結婚したが、末に鳩宮の子を身ごもっていた。鳩宮の子をおろせと迫る良人と争って、終に良人を殺してしまう。沢は獄の中で鳩宮の娘を産み、その娘は看守長の家に預けられたが、まもなく行方知れずになってしまったというのである。これを聞いた鳩宮は、悔い改めて牧師にまでなったものの、かつて、処女の神聖を犯した罪が、このように罪に罪を産むに至ったのかと、幾日も悩み苦しむ。やがて、妻エミヤは妊娠する。エミヤは妊娠の身でありながら、孤児院を始めようと、まず手始めに三人の乞食の子を招き入れて、王子や王女でも迎え入れるように、立派な椅子にすわらせる。その乞食の中に、獄の中で生まれた私生児がいた。十二、三の娘である。それが実は我が子と知って、牧師の鳩宮はさらに驚き苦しむ。鳩宮は市ヶ谷の刑務所に教戒師として説教に行く。そこにかつても愛人沢がいた。ある嵐の夜、沢は脱獄して牧師館に助けを求めてきた。疲れて何も知らずにエミヤは眠っている。びしょぬれに濡れて髪をふり乱して脱獄してきた沢に、鳩宮は自首をすすめる。だが、自分の為にこのような境涯に落ちた沢を思うと、再びあの冷たい牢獄に帰れとは重ねて言いかねた。止む無く他に部屋を借り沢をかくまう。一方、鳩宮の父母は、姉の家を引き払い鳩宮の家に同居していた。目の青いアメリカ人のエミヤをきらって、父母はことごとくに辛く当たった。エミヤが妊娠しても、「猫の目のような孫なんて薄気味が悪い」と喜ばない。しかも息子の鳩宮には、しきりに離縁をすすめる。だが、エミヤはしとやかに素直に、夫にも父母にも従っていた。乞食の子たちは、エミヤをマリヤ様といい、鳩宮の母を鬼婆と呼んだ。やがて沢の身元が知れ、沢もかくまった鳩宮も牢獄につながる身となる。留守宅を守るエミヤに、鳩宮の両親はいよいよ辛く当たった。ある日、エミヤに、鳩宮の母は自分の為にえみやが薬を注いで差し出した盃を、エミヤに投げつける。エミヤの白い額から血が流れた。だが、エミヤは、その痛みをこらえてほほえんでいる。その姿に、父親の気持ちが折れた。牢獄の夫に面会したエミヤは傷をどうしたかと問われて、ちょっと打っただけ、と答えて、母に盃を投げられたとは言わない。

エミヤは沢が夫にかくまわれていたことも、二人の仲に子供がいたことも、まして夫が沢の隠れ家に泊まったことも、知らずにいた。

そのすべてを知った時、さすがのエミヤも腹にすえかねて、ついにおこって、早速アメリカの父母に手紙を書いた。泣きながら書き上げたその手紙を、エミヤは出すことができなかった。ひとつひとつ夫の罪をあばきたてる自分のみにくさに、エミヤは恥じたのだった。「義人なし、一人だになし」壁に貼られたこの言葉を見るや否や、エミヤは手紙を屑かごに破り捨てた。エミヤの顔は白く清らかに輝いていた。やがて、沢は獄中で縊死し、エミヤは子供を産む。すでにその時は鳩宮の父母も心が溶けていた。子供の生まれた平和な家に鳩宮は帰ってくる。しかし、沢の死を聞いた鳩宮は以前にも増して悩み苦しむ。次第に心弱った鳩宮は、沢の白骨を幻に見るようになる。沢の一生を誤らせたのは、全く自分の仕業であると心攻められて、終に彼は家出をした。そして放心の鳩宮は鉄道をふらふらと歩いていて汽車にはねられ、死んでしまった。